外国人として生きる

ふたつのことばで落語がもっている笑いのパワー全開！

藤井 幸之助（ふじい こうのすけ）
神戸女学院大学非常勤講師

在日コリアン三世の落語家

笑福亭銀瓶（しょうふくていぎんぺい）さんの職業は落語家。この一〇月で四一歳になった。大阪を中心に高座、テレビ、ラジオ、で意欲的に活躍している。

生まれ育ったのは神戸で、民族名は沈鍾一（シムチョンイル）といった。祖父母の代に日本に渡ってきた在日朝鮮人三世にあたる。ずっと日本の学校に通い、朝鮮語もわからなかった。

成績優秀だった銀瓶さんの将来の夢は学校の先生だった。しかし、外国籍であることから先生になることは困難だと思い、アボヂ（父）の「エンジニアになれ」というすすめで、工業高等専門学校（高専）へ進学する。

民族名を名のるようになったのは、高専二年のとき。たまたま参加した朝鮮奨学会のサマースクールで、民族名で生きる同世代の同胞に出会ったのがきっかけだった。

しかし、学生時代、将来への具体的な夢をもてないままであった。卒業後の進路に悩んだあげく、人を笑わせることを仕事にできればと、一九八八年に笑福亭鶴瓶（つるべ）さんに弟子入りした。

当初、タレント志望であったが、師匠の芸の深さが落語から来ていることがわかり、同時に落語のおもしろさを感じ、次第に落語家を目指すようになった。

朝鮮語で笑いを伝える

銀瓶さんは今、日本語だけでなく、じつは朝鮮語＝韓国語でも落語をはじめている。日本人の多くにとって落語は日本語で語られるものである。にもかかわらず朝鮮語で落語をしようと思ったのには、落語のおもしろさを朝鮮語でも伝えたかったからだ。自分の特色もそれでこそ出せると思った。

ラジオのレポーターとして、みんぱく特別展「二〇〇二年ソウルスタイル　李さん一家の素顔のくらし」の取材で韓国に行った。ソウルに李さん一家を訪ねたが、このときはことばがまったくわからず、通訳を介してインタビューすることが非常にもどかしかった。

二〇〇四年秋、ときあたかも韓流ブームの最中。ビートたけしが主人公の在日朝鮮人を演じる映画「血と骨」の冒頭の部分を観て、自分のなかにある朝鮮の血が騒いだ。

「やっぱりことばができんとアカン」。早速、NHKハングル講座のテキストを買ってきて勉強しはじめた。久々の勉強だったがスラスラ頭に入ってくる。この調子なら、そのうち話せるようになると思った。

「自分は落語家だから韓国語で落語をすれば、もっと語学の勉強になるし、日本のすばらしい文化である落語で韓国人を楽しませたい」と思った。

「動物園」というネタを知り合いに翻訳してもらい、一ヵ月半で丸覚えした。それでも、落語のおもしろさが、ことばをこえて朝鮮語でも伝わるのか、不安でもあった。

二〇〇五年二月、朝鮮語のわかる人に聞いてもらおうと、大阪朝鮮高級学校ではじめて披露した。結果は生徒たちに大ウケだった。なにより自分の朝鮮語が通じたことがうれしかった。そして、落語がことばをこえたことも。

二〇〇五年秋、銀瓶さんははじめて韓国ソウルで日本語を学ぶ大学生の前で日本語と朝鮮語で落語をやった。そこでも笑いがとれた。それから毎年、韓国で落語会をしている。去年はみんぱく特別展で取材した李さん一家も見に来てくれて、今度は朝鮮語で会話ができた。

演目も「動物園」「時うどん」や「宿題」（作：桂三枝）と、一年に一作ずつ増やしていっている。今年は四作目の「犬の目」だ。

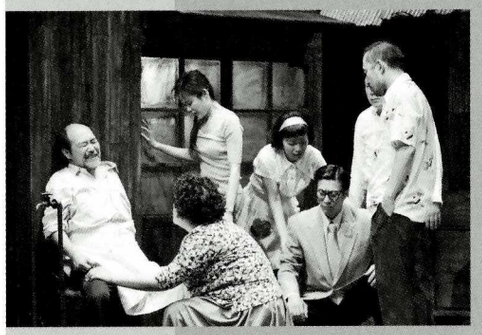
両方の美しさがわかる存在

銀瓶さんにとって、今年はまた特別な一年になった。

四月に東京で、五月にソウルで日韓合同公演の演劇に出演したことだ。一九七〇年前後の、関西のとある焼肉屋を営む在日朝鮮人家族と隣人たちの人間模様（チョンパウィン）を描いた「焼肉ドラゴン」（作：鄭義信）だ。

駐済州日本総領事館主催の韓国語落語公演（10月29日）（提供：松竹芸能）

東海朝鮮歌舞団のメンバーと（提供：松竹芸能）



新国立劇場
日韓合同公演「焼肉ドラゴン」
背広姿が銀瓶さん
（撮影：谷古宇正彦）

高座で落語を演じる笑福亭銀瓶さん（撮影：大西二士男）

「笑福亭銀瓶の出演情報」http://www.kdn.ne.jp/~aohyon/ginpei/

劇中では朝鮮語が飛び交う。

稽古（けいこ）中から、韓国の役者、スタッフたちとのやりとりが銀瓶さんにとっては生きたことばを学ぶ限りなく貴重な時間となった。

孫が朝鮮語で落語をやることをことのほかよろこんでくれたハルモニ（おばあさん）が東京公演中に亡くなった。通夜も葬式も行けなかったので、ソウル公演にはハルモニの写真をお守りにもって行った。

銀瓶さんは今も忙しい仕事の合間に時間を作って、朝鮮語の勉強に余念がない。少しずついえることが増えていくのが楽しくて仕方がない。確実にことばが身についてきていることを実感している。

朝鮮語で落語をやるときの銀瓶さんは生き生きしているといわれるし、自分でもそう思う。朝鮮語でやることで、日本語の落語にも深みが出てきた気がする。

「ウリマル（私たちのことばの意）で落語をやるようになって、韓国語の美しさがわかるようになりました。そして日本語も美しいと思うようになりました。ぼくたち在日は韓国語と日本語の両方の美しさがわかる存在なんです」と銀瓶さんは言う。

落語がもっている笑いのパワーを、今日も銀瓶さんはふたつのことばで全開させている。